

問題

資料を読み、内容を踏まえた上で「海」と「国際」の二語を用いて、あなたの考えを600字以内で述べなさい。

★魚がいなくなる

科学雑誌『ネイチャー (Nature)』にも、セイウタラの漁獲量を1970年から調べていくと、増えたり減ったりを繰り返しながら徐々に漁獲量を下げ、このままでいくと、2050年には取れなくなってしまう可能性が示唆されました。

未来の危機的な予測は『ネイチャー』のみならず、2008年生物多様性条約第9回締約国会議で「生態系と生物多様性の経済学 中間報告書」(The Economics of Ecosystems and Biodiversity : TEEB : ティープ)として発表されました。

そこには、2030年までにサンゴ礁の60%が失われる可能性がある、と明記されています。サンゴ礁は、小魚の産卵の場や隠れ場となる貴重なところです。そればかりか、ワカメなどの海藻類と同様、酸素をつくり出しています。それがあと20年ほどで、60%がなくなってしまうかもしれないのです。サンゴ礁が、なくなっても自分とは関係ない、と思う人がいるかもしれません。しかし、魚のゆりかごがなくなることで、多くの小魚の生息数が減り、それを餌にする魚たちも生きられなくなります。その結果、2050年に商業用漁業がダメになってしまうのです。焼き魚、煮魚、お刺身…私たちの血となり肉となる大切な食料としての魚も、まもなく幻の食べ物になってしまうのかもしれない。

★10%の法則

魚がダメなら肉があるから大丈夫と思ったら大間違い！ 生態系には10%の法則というものがあります。私たちの体重を1kg増やすために、牛肉なら10kgが必要で、その10kgをつくるために、牧草100kgが必要なのです。つまり、魚がなくなり牛を食べようになれば、広大な牧草地が必要となるため、建物を取り壊すか、森を切り開くこととなるのです。また狭い場所に過剰に牛を放牧させると、糞や踏みつけにより土地が荒れてしまいます。過放牧の結果、毎年4億7700haが砂漠化しているのです。2050年まであと40年。そのころは生きていないから関係ないと思うのは、大間違い。真綿で首を絞められるかのごとく、徐々に徐々に蝕まれていくのです。それに愛する子どもや孫を、そのようなひどい目に遭わせてもよいのですか？

(長谷川 明子 「生物多様性 私と地球を元気にする方法」による)